《……ガバッ》
（“あなた”が起きて、布団に驚き出た音）

意識を取り戻すと、昔ながらといった様子の古い和室に寝かされていた“あなた”。
ここは何処なのだろうと身を起こすと、近くからトントントンと、何かを刻む小気味良い音が聞こえてくる。
様子を見に行くと割烹着を着た狐の少女が、土間で手馴れた様子で食材を切っていた風景がそこにあった。

《トントントン……》
（少し離れた場所から包丁で物を刻む音）

？？？
「ん？　おぉ……起きたのかの？
うむ、では少し待っておれよ。
こんな時間じゃから、あり合わせも良い所じゃが……気を失わせてしまった侘びじゃ。簡単な夕餉の支度をしておるから、良かったら食べておくれ。
あぁ……言っておくが、逃げようとはせんでおくれよ？
流石にワシも2度もお主を気絶させるの手間じゃからのぅ。
……それに、この辺りの夜の森は気性の荒い猪などもおるでな。
お主が出会(でお)うて、下手に怒らせれば命はないぞ？
まぁ、この場所はワシが獣避けの結界を敷いておる故安全じゃがのぅ！
……本来は人避けの結界もあるから、よぽど切羽詰ってでもおらん限り近寄りがたく感じ、お主のような人も来れんはずじゃったんじゃがなぁ。
まぁ、来てしもうたものは仕方ないからのぅ」

《じり……》
（まだ信用出来ないという様子で、“あなた”が布団の上で後ずさった音）

？？？
「むぅ……まだ警戒されておるのかのぅ。んんっ！（咳払い）
ワシの尾や耳に驚いておるのだろう事は分かるが、ワシにお主を害する気はないから安心せい！
ここに連れて来たのは、あのまま夜の森にも放置しておけんし、人通りのある道路に連れて行こうにも、、もう車も通らんような時間になってしまったからのじゃ。
それで明日にでも村への道なり、バスの乗り場なりへと案内してやろうと思って、一晩泊めてやろうとここに連れて来ただけじゃ！他意はない事は、ワシの尾に賭けて約束してやろう！」

《ふぁさり！》
（言葉と共に、自慢気に尻尾を一つ揺らしてみせる音）

少女の言葉に、“あなた”が警戒から戸惑う様子になったのを察し、それをちらりと一瞥してから視線をまた鍋の中へと向け食材を入れ始める。

《とんとんとん……ちゃぽん、こぽこぽ……》
（材料を切り、料理を続けている音）

？？？
「さ、分かってくれたのならそのまま部屋で大人しくしておいておくれ？
料理ももうちょっとで出来る故、すぐに持っていってやるからの。
……流石に白米を炊き直す時間はなかったからのぅ。昼の残りの冷や飯になるが、吸い物も用意するので、それで勘弁しておくれよ？」
《とんとんとん……ぱち、ぱち……こぽこぽ》
（続く料理の音）

そう言って再び料理へと意識を向けてしまった狐の少女の様子に、“あなた”は何とも言えず黙ってしまい、言われるまま居間で少女を待つのであった……。

＝＝＝＝＝＝＝＝

《ことんっ》
（出来上がった料理を持ってきて置く音）

？？？
「さ、出来たぞ！
芋の煮っ転がしと、大根と鳥の塩汁、それに水菜と油揚げの煮浸しじゃ！
飯は言うた通り冷えておるが、羹（あつもの）と一緒に食べる事で許して欲しいのじゃ。
ここは電気が通っておらんからのぅ、機械の類はないんじゃよ。
お主の昨晩のくたびれておった様子を見るに、一日中歩いてでもおったんじゃろう？
禄（ろく）に飯も食えんかったじゃろうし、遠慮なくたーんと食べてくれて構わんからの！」

湯気を立てながら置かれた質素ながらも、ほっとする体の温まるような和食が居間で待つ“あなた”の前に差し出される。
未だにどうしていいか迷う“あなた”の様子に気付き、少女ふむと思案をし……。

？？？
「うぅん、手をつけたくなさそうじゃの？
毒や変な物等入れておらんから、そう怪しまんで欲しいのじゃが……。
むぅ……まぁ、うっかり変化の術を使い忘れてお主を警戒させるような尾や耳を晒してしもうたワシの落ち度でもあるんじゃよなぁ……。うー……警戒されるのは仕方ないかもしれんが、正直……少し寂しいのぅ」

？？？
「そうじゃな……安心せぬと飯が食えぬというなら、まずはワシの正体を言うべきかのぅ？
あまり語りたいものではないが、お主がそれで安心するというなら……うむ、仕方あるまい。
まぁ既に察しておるような気がせんでもないがの？
ワシの名は……そうじゃな。何者でもなく、名も無くした狐……無狐（ナコ）とでも呼んでくれれば十分じゃ。
お主が察しておる通り、ワシは……所謂（いわゆる）、狐のアヤカシじゃ。
とはいえ、元は豊穣を司るウカノミタマ様という神に仕えておうた神使（しんし）の狐という奴での。
人を害する気はない……いや、そもそも興味を持ちすぎて、神使としての役割すら果たせず放逐（ほうちく）されてしもうた、半端者じゃからな」

苦笑をするように、狐の少女が笑う。

ナコ
「ワシは、神に仕えておった狐の中では変り者だったみたいでの。
神に仕え、神の言葉を人に伝え、またある時は命(めい)を受けて人の営みに介入する……そのような生を歩んでおった。
じゃがな……ある日ふと、自分が妙に人の世の移り変わりに強く興味を持っておる事に、気付いてしもうたのじゃ。
アヤカシや神といったモノは基本的に一度そうとなってしまえばその性質は変わる事がない。
じゃが、人というのは弱く、神仏に頼らねば生きていけぬ程に儚い存在であるにも関わらず、瞬きの如き短い生(せい)の間に……驚く程早くに、その生活を変えていってはおらぬか、とな」

《とんっ……とくんとくんとくん》
(酒を持ってきて、注ぐ音)

少女……ナコは料理と共に持ってきていたのか、何時の間にか手の中にラベルのない一升瓶を抱えていた。
それを自身の椀へと注ぐと、そのままクイと口に運び傾ける。

ナコ
「んっ、んっ……ぷはぁっ！ うん……今年の人の世の酒も美味いのぅ！
どれ、油揚げと合わせてみると……はぐっ！ んぐんぐ……んぐっ！ごくごく……んっ、ぷはぁぁっ！
うむうむ、短い時間じゃった割によう味が馴染んでおるな？ 酒とも良い相性で……ふふ、悪くない出来じゃ？
どうじゃ、お主も飲まんか？」

何時の間にか持ってきていたのか酒瓶を傾け、“あなた”に差し向ける狐の少女、ナコ。
その顔があまりに優しげで、つい受け取りそうになるが……アヤカシなどと言われてそう易々とは杯を受けられない。
受け取ろうとした途中で固まった“あなた”を見て、少女が一、寂しそうな笑みを浮かべる。

ナコ
「そうか、飲まぬか？ まぁ、飯を食うのにも戸惑うのに、酒は尚更(なおさら)じゃったか……。
ハハ……そうじゃよな？ 気が回らんくて、すまぬのぅ。
あー……えーと、何処まで話したんじゃったか？
あぁ……そうじゃそうじゃ！ ワシが変り者じゃったと言った所までじゃな？
そう、ワシはな。人の世の移り変わりの速さに気付いてから……ウカノミタマ様の遣いをしておったはずなのに、人の様子をもっと良く見てみたいとそう思うようになってしまっておった。
暫く間ならば構うまいと、生き物がそんなに早くに変わっていくのであれば、少しばかり力を割いて、暫し(しばし)見ていても大丈夫じゃろうなどと、好奇心に負けて……そう思うてしまったんじゃ」

ナコ
「そしたらなんとまぁ呆れたものでの！ 思うておった通り、人というのはどんどん、どんどんと。
人であるお主からすればそうではないのかもしれんが、ワシ等アヤカシの感覚からすれば信じられ

んような速さで、その生き方を変えていきよる！
弱くて、小さくて、手で握ってしまえば、それだけで潰れてしまいそうな生き物であったはずじゃのに。
いつの間にか自在に火を操る術(すべ)を覚え、何もない空間に妖術のように雷(いかずち)を……
電気を介し、光を生み出す術(じゅつ)を覚え。
地を獣よりも早く駆ける絡繰り(からくり)を生み出し、鳥さえも置き去りにして空を果てまでも飛んでいく技(わざ)を身につけてしまいおった」

ナコ
「んくっ、んっんっ……ぷはぁ！　ふー……。
ワシはもう、呆れるやら、理解が及ばんやらで、のめり込むように夢中になってしまっておった。
一つ目を瞑っておる内に、人の姿も生活もどんどんと変わってゆく。
次に目を瞑れば何が変わっておるのじゃろうか？
次はどんな知らぬものが、訳の分からぬものが目に飛び込んでくるのじゃろうか？
そう、人の近くで身を潜め、ワクワクしてただじっと……見つめてしまった」

ナコ
「……そんな事にうつつを抜かしておったからじゃろうなぁ。
ふと気がつき周りを見渡すと、人の時代の進みにつれて、人でないモノどもの世は終わりを迎えていたんじゃ。
あれだけいた八百万(ヤオヨロズ)の神々や、ワシと同じようなアヤカシどもの姿はどこぞへと失せてしまっておったのじゃ。
……ある者は人と交わりその存在を変えたのかもしれん、また別のモノ達は人の寄り付かぬ……
ワシにも、何処にあるか分からぬ地へと……姿を消してしまったんじゃろう。
人を見ている事に喜びを覚えて何もせんようになってしまっておった……ワシだけを残して」

ナコ
「んっ……ごくっ、ごくっ……はふぅ！
はぁー……なぁお主、知っておるか？
アヤカシなぞという者は、人に思われ、恐れられてこそ存在出来るものなんじゃ。
そういうモノであるからこそ、人の操れぬ力を振るう存在として在(あ)れる……それが世界の定めた摂理というものなんじゃ。
……なのに、ワシはまだこうしてここにおる。
為すべき事もすでに無く、知り合いなどもおらんようになった世で……たった一匹。
何故、力が弱まったとはいえまだアヤカシとしての力を振るえるのか、それすら自分でもよう分からぬまま……ここにこうして残されて、こうなってしまっても尚、変わらず人の世に惹かれ……見つめ続けておる」

ナコ
「或いは……仕事を放り、己の趣味にかまけてしもうたワシへのこれは罰なのかもしれんのぉ。
仕えておった神仏(しんぶつ)より、霞の如く消え去るその瞬間までそうしておれと……そう言われておるのかもしれん。
ふふ……真実は分からぬがな！すでに、ワシにはその声も気配も感じられぬようになってしまった！
……ただ、そうなのかもしれんと思うて、寂しさと後悔と……。

それでもまだ目が離せぬ人の世の移り変わりに目を奪われながら、こうして森の中でせめてもの侘びと思い、あの方々を祭っておった寺に住まい、彼等を忘れぬようにしながらながら生きておる……という訳じゃよ」

ナコ
「ハハ……、長話を聞かせてしまってすまなかったのぅ！
自分以外の者と、こうして長話する機会など久しく無くなってしまっておったから、つい年寄りの自分語りを延々としてしまったわ！
……まぁ、そういう事じゃ。
お主がワシの姿を見て恐れるのも理解出来るが、ワシはお主を害するつもりはない。
ただ本当に、放っておけんかっただけなのじゃ……そう思って貰えたら、嬉しいんじゃがな。
つまらぬ長話だったじゃろうが、これで……少しは不安は解けた、かのぅ？」

少女は長い話を言い終えると、椀を飲み干し、また酒を注ぎ始める。
そして諦めたようにも、悲しんでいるようにも見える顔が、“あなた”の胸をどうにも……掻き毟ってやまなかった。

《とんっ……とくんとくんとくん》
（酒を持ってきて、注ぐ音）

ナコ
「んくっんくっ……ぷはぁっ！ふぅー……。
まぁ……まだ不安なら無理に飯を食えなどとは言わぬよ。
いづれにしても明日になったら案内はするつもりじゃから……。
さて……それではワシは中座させて貰おうかの。
近くにおってはお主を不安にさせたままにしてしまうようじゃし……また、明日じゃ。
せめて、ゆっくり体を休めるんじゃよ？」

《しゅる……すと》
（布が擦れ、立ち上がる音）

少女が寂しげな表情のまま、立ち上がり去ろうとする。
“あなた”はそれを見ていて、どうにも……我慢出来ぬ程に、腹が立った。
何故こんなに少女が悲しげな顔をしなくてはならないのかと、そしてそんな顔をさせているのが他ならぬ自分自身であるという事が。

貴方はあつものの椀をガッと掴むと、そのまま口につけ流し込もうとした。
少女の長話で少し冷めてしまっていたとはいえ、まだまだ熱い汁ものが喉の奥へと勢いよく入り込み、思わずむせてしまう。

《ガシッ……ガバッ！》
（食器を掴む音）

ナコ
「あっ、お主（ぬし）！？　急にそんな椀（わん）を口に運んでは……あぁっ！？
そんなに慌てて食うと喉に詰まってしまうぞ！……っと、言うておる側（そば）からほれ、咽（む

せ)ておるではないか！
まったく、急にどうしたんじゃ！？こらっ、慌てるでない！
ええい……酒しかないが、これをゆっくり飲め！落ち着いて、ゆっくり、ゆっくりじゃよ……？
別に慌てんでも、食い物を下げなどせんから」

《さす……さす》
(慌てて近付き、背中を擦る音)

突然の行動に驚いた少女が慌てた様子で近付いてきた所へ、貴方は自分にも用意されていた酒の椀を差し出す。

ナコ
「ん、そうじゃ……ゆっくりでいいからの？
そんなにがっついでは体も驚いてしまうのじゃ。
ワシは下がるから、気にせんとそのまま食べてくれれば……ん、なんじゃ？
酒を、もう一杯くれ……？
それは、ワシと……飲んでくれる、という事かのぅ？
ど、どうしたんじゃ急に！？ワシの事を、恐れておったんじゃ……なかったのかのぅ？」

狐の少女……ナコの問いに、貴方が頷く。
それを見て、ナコは驚いたように目を大きく見開いた。

ナコ
「な、なんじゃ急に！？お主、ワシの事を警戒しておったじゃろう！
は……？突然飲みたくなったって……えぇい、よく分からん事を！
いいから酒をって……むぅ！お主、勝手な奴じゃなぁ！？
……ふっ、くふ♪　まぁ、ワシは一緒に飲んでくれるなら、嬉しいから構わぬが、の♪
くふ……ふふふ♪
誰かと酒を交わすなど久しぶりじゃ！
誘うたのはお主なんじゃから、簡単に潰れてなどくれるなよ♪」

貴方の様子に、少女が呆れたような顔をしたが、それがじょじょに嬉しげな……口の端を綻ばせた満面の笑みへと変わっていく。

《ふぁさ……ふぁさ……》
(嬉しさに尻尾が揺れる音)

ナコ
「まったく、変な人間じゃなぁ、お主♪
ふふ……とりあえずお主の服についてしまった汁を拭うから、ちょっとそこで待っておれ！
飲むからにはもう少しツマミもあった方が良いじゃろう。煮物などもまだ残っておるから、それも一緒に持ってくるからのぅ！」

《パタパタパタ》
(嬉しげに、小走りに一度離れる足音)

ウキウキといった様子で、ナコが足早に去っていく。
そして暫しとすら言えぬ程早く、また早足にナコが戻ってくる。

ナコ
「ほれ、拭うてやるからもそっと体をこっちに寄せい！……あぁもう、口の周りも汁だらけじゃ！
手間の掛かる奴じゃのぅ……次は落ち着いて、味わって食べるんじゃよ？
……ワシも、お主のために折角作ったものなんじゃから、味わって貰えると嬉しいからの……ふふ♪
では、ほれ！お主の酒じゃ♪」

《とんっ……とくんとくんとくん……こつんっ》
(酒を持ってきて、注ぎ……盃を合わせた音)

こぽりこぽりと、“あなた”の椀へと注がれていく酒。
そして、自身の椀へも同じように酒を注ぎ、ナコは随分と久しぶりの他者との交わりを喜ぶように、そのまま椀を貴方の盃へとこつんと、笑みと共に突き合せた。

ナコ
「森で出会(でお)うた、名無しの狐と慌て者の人間との出会いに乾杯じゃ！
んぐっ！んっんっんっ……♪ ぷはぁっ、くぉん♪
なんだか先ほどよりも酒が美味いのぅ！くふ、ふふ、あはっ♪
ほれ、お主も飲め！食え！あるだけ全部持ってきてやるからの♪
好きなだけ飲んで騒いで構わんぞっ♪ んっ……ごくっ、……っぷはぁっ♪

貴方に酒と飯を勧めながら、ナコはまた杯を空ける。
そして、やれ食え、さぁ飲め、最近の人間の都会とやらはどうなっているのだと。
様々に話をせがみ、食事を薦めながら、夜も深けた時間の騒がしい夕餉は続いていく……。